

豊橋にあった、陸軍教導学校と予備士官学校

——愛知大学の「施設面での“前身”」として——

佃 隆一郎

〈大学史事務室〉

はじめに

豊橋市の愛知大学をはじめ、県立時習館高校などの各学校が集中している“同市南部の文教地区”は、元来日露戦争後に旧陸軍第十五師団の衛戍地（現在でいう駐屯地）として建設された敷地が、第二次世界大戦敗北（による旧軍解体）後転用されたものであるが、第十五師団はそれに先立つ20年前の1925（大正14）年に、「宇垣軍縮」と呼ばれる陸軍再編で廃止されていたのであり¹⁾、その後は新設された陸軍教導学校、さらにはそれが移行した陸軍予備士官学校をはじめとした、陸軍の各種施設として敗戦まで使用された。

したがって、例えば愛知大学が創設された豊橋校舎は「第十五師団跡」よりも「予備士官学校跡」と呼ぶべきであるが、教導学校も予備士官学校も愛知大学とはむしろ別のものであり、両学校を「愛知大学の前身」として意識する必要は特にない。しかし、近年愛知大学豊橋校舎に残っている旧陸軍建造物への関心が「旧軍遺跡」として高まりつつあることや²⁾、教導学校や予備士官学校であった時期は満州事変以来の十五年戦争期にあたることから、第十五師団期と現代との間に存在していたこの時期について、愛知大学や地元の人々が一定の認識を持つことは意味があるのではと思う。そこで本稿では両学校についての大まかな解説とともに、これまで逐次判明・確認してきた関連各資料を紹介することによって、両学校に対する今後の認知への一助にしたい。

1. 豊橋陸軍教導学校から豊橋陸軍予備士官学校へ

(1) 陸軍教導学校・予備士官学校とは

宇垣軍縮による陸軍再編・近代化（師団削減により浮いた経費を軍近代化に転用）の延長的施策として、豊橋や仙台、熊本に1927（昭和2）年7月、勅令第212号により設置された下士官（伍長・軍曹・曹長。一般召集兵内のいわば管理職であり、1933年までは「下士」と呼称）養成機関が陸軍教導学校である。これは明治の一時期（1870～98年）置かれていた「教導団」の復活ともいえ³⁾、その後各部隊に教育を任されていた下士官を“国軍の中核”として見直すべく、宇垣軍縮で廃止・移転された部隊跡地に新設されたものであった。課程としては、各部隊で志願した上等兵のなかから連隊長が選抜した者に、1年間の隊内教育を施したあと教導学校歩兵科に入学させ、そこでの1年間の課程修了後原隊に戻らせて下士官に任官する方式がとられたのであり、教導学校はのちに盛岡や久留米などにも増設された（なお、歩兵以外の下士官の養成は、騎兵学校など応分の各学校で実施されたが、後述するようにのちには教導学校にも砲兵科と騎兵科が増設）。

一方で中国との戦争が全面化して、陸軍幹部としての将校（士官学校を卒業した、少尉以上の職業軍人）の数に不足を来たしはじめたことから、甲種幹部候補生（現役入隊した高学歴者を選抜し、非常時に将校にさせる制度）を専門に教育する陸

付表1 陸軍の諸学校一覧 (1938.12の時点)

補充学校(将校・下士官の養成に当たったもの)	管轄
陸軍大学校	参謀総長 教育総監 教育総監 教育総監 航空総監 教育総監 教育総監 陸軍大臣 陸軍大臣 教育総監
陸軍幼年学校 (所在地:東京、仙台、名古屋、大阪、広島、熊本)	
陸軍予科士官学校 (1938.12士官学校予科が分離独立)	
陸軍士官学校 (1938.12東京・市谷から神奈川県座間に移転)	
陸軍航空士官学校 (1938.12士官学校分校が独立)	
陸軍科学学校 (もと陸軍砲工学校)	
陸軍教導学校 (所在地:仙台、豊橋、熊本)	
陸軍憲兵学校 (もと憲兵練習所)	
陸軍工科大学校 (のち陸軍兵器学校)	
陸軍予備士官学校 (所在地:仙台、盛岡、前橋、豊橋、久留米、熊本)	
実施学校 (将校・下士官の学識技能の向上に当たったもの)	
陸軍歩兵学校	教育総監 教育総監 教育総監 教育総監 教育総監 教育総監 教育総監 教育総監 教育総監 教育総監 航空総監 航空総監 航空総監 航空総監 航空総監
陸軍騎兵学校	
陸軍戦車学校(のち千葉陸軍戦車学校と改称)	
陸軍野戦砲兵学校	
陸軍重砲兵学校	
陸軍防空学校(のち千葉陸軍高射学校と改称)	
陸軍工兵学校	
陸軍通信学校	
陸軍自動車学校(のち陸軍輜重兵学校が分立)	
陸軍戸山学校	
陸軍習志野学校	
陸軍航空技術学校	
所沢陸軍飛行学校	
下志津陸軍飛行学校	
明野陸軍飛行学校	
熊谷陸軍飛行学校	
浜松陸軍飛行学校	
各部の学校	
陸軍経理学校	陸軍大臣 陸軍大臣 陸軍大臣
陸軍軍医学校	
陸軍獣医学校	

注: 陸軍航空技術学校以下の航空総監管轄の各学校は、1938年12月の陸軍航空総監部設立以前は陸軍大臣の管轄であった。

出典: 太平洋戦争研究会編『日本陸軍がよくわかる事典』(2002年、PHP文庫) 173ページ

軍予備士官学校がさらに1937年、予算上教導学校に併設される形で豊橋と仙台、久留米に新設された(正式には勅令第139号によって翌38年4月10日設置となり、ついで同第517号によって39年8月1日に設置場所が確定)。修学期間は約8カ月(第一期生は5カ月で、11カ月の時期もあった)であり、生徒は卒業後すぐに将校として遇されることになっていて、施設は各教導学校のものが転用されたのであり、下士官の養成や訓練は、各地の部隊における軍教育隊での実地教育へと次第に移行した。アジア太平洋戦争突入後の1943年8月には、施設を全面的に予備士官学校に転用するために教導学校は全廃となり、一本化された予備士官学校は敗戦時には、「満州国」に置かれたものを含め8校に達した。

(付表1に陸軍の諸学校の一覧を別掲)

(2) 豊橋の両学校の規模・敷地の変遷

第十五師団廃止ののち軍管理のまま空き地になっていた、歩兵第六十連隊跡地(現愛知大学敷地の中部以北)にまず豊橋陸軍教導学校歩兵科(一期生は計556名。付表2参照)が、前述の通り1927年に新設された⁴⁾。施設は連隊のものを転用したが、講堂(愛知大の第二体育館として現存)など一部は新築した。1931(昭和6)年に学校の外壁が築堤から鉄筋コンクリート塙に改造された際、崩した土を生徒たちが一か所に盛った地点は「吹雪山」と名づけられ、塙ともども現在も残っている(1995年、吹雪山に教導・予備士官学校の記念碑が、後述する「高士会」によって建立)。

1933年8月には、軍拡計画実施による砲兵科と騎兵科の増設にともない、騎兵第四旅団司令部になっていた南隣りの旧師団司令部一帯(現愛知大敷地の南部)が学校本部に、空き地のままになっていた西隣りの野砲兵第二十一連隊跡地(現県立時習館高校などの地)が砲兵科と騎兵科にそれぞれ転用された。この配置は1937年からの豊橋陸軍予備士官学校への移行の際も、騎兵科がなくなった(豊橋陸軍教導学校騎兵科は38年千葉県

付表2 陸軍教導学校各年・季節別卒業生数
(仙台・熊本を含む)

卒業 年季	歩兵科	同 (仙台)	同 (熊本)	騎兵科	砲兵科	合計
1928夏	556	489	571			1616
1929秋	348	438	456			1242
1930春	204					204
1930秋	373	476	496			1345
1931春	184					184
1931秋	384	487	475			1346
1932春	146					146
1932秋	247	388	406			1041
1933春	133					133
1933秋	307	?	420			?
1934春	178					
1934秋	435	?	582	177	359	?
1935春	198					
1935秋	456	?	?	180	360	?
1936春	190					
1936秋	589	?	623	182	384	?
1937春	107					
1937秋	748	756	664	219	429	2816
1938春		796	711	177	334	2018
計	5783	?	?	935	1866	?

注：季節の「春」「秋」の月は各年によって異なるが、概ね「春」は5月、「秋」は11月であった。
(1928年のみの「夏」は7月)

出典：『豊橋陸軍教導学校史（稿）』129～131ページの数字より作成。

習志野の騎兵学校に統合）以外は継承された。

1940年11月に、市内東部にある西口町の陸軍作業場跡に教導学校の校舎（戦後福祉施設に転用されたが現存せず）が新設されたことにより、従来の校舎は予備士官学校のみとなったが（当時入校した在籍者数を付表3に別掲）、実質的には西口新校舎も予備士官学校として機能していて、下士官教育は行なわれなかった模様である。そして、1943年8月には教導学校が名実ともに廃止されたのにもない、予備士官学校は第一予備士官学校に、西口町の旧教導学校は第二予備士官学校にそれぞれ改称され、終戦直前の1945年7月になると、「第二」に習志野への移転命令が下ったことで「第一」は旧称に戻り、そのまま敗戦による廃校を迎えた（旧「第二」は移転作業中に敗戦⁵⁾）。

付表3 豊橋陸軍教導学校第五期在籍者数
(1940.12～41.7在学)

区 分	将校	下士官	生徒	兵・雇員	計
歩兵生徒隊					
第一中隊	6	8	176	4	194
第二中隊	6	8	148	4	166
第三中隊	5	8	159	4	176
第四中隊	5	7	173	4	189
重機関銃中隊	6	9	136	9	160
歩兵砲中隊	7	5	67	8	87
通信中隊	5	8	93	8	114
(小 計)	40	53	952	41	1086
砲兵生徒隊					
第一中隊	6	9	128	9	152
第二中隊	6	10	122	9	147
第三中隊	7	10	142	10	169
第四中隊	8	9	166	11	194
(小 計)	27	38	558	39	662
合 計	67	91	1510	80	1748

出典：『殉皇 豊橋陸軍豫備士官学校の記』解説12ページ

なお、空襲による被害は、豊橋市街地が灰燼^{かいじん}に帰した一方で、周辺の他施設ともども軽微であった。

ちなみに両学校の戦闘訓練の場は校内のほか、校外南部に広がる高師原・天伯原^{たかしぼら てんぱくぼら}を“大陸作戦に適した演習地”として、(以前の第十五師団や)第三師団ともども使用していて、そこでの訓練は「鬼の天伯、地獄(または蛇^{じゅう})の高師、流す涙は梅田川」と呼ばれたほど激烈なものであった(「梅田川」は高師原・天伯原を分けている河川)。また、少なくとも教導学校時代には、隣りの静岡県にある天竜川でも訓練が行なわれた(後述)。

2. 豊橋陸軍教導・予備士官学校に関する文献・史料

(1) 関連した各文献

豊橋陸軍教導学校・(第一)陸軍予備士官学校についての通史類としては、個人が著わしたものであるが(教導学校の卒業生であった)浪崎敏武氏の遺作『豊橋陸軍教導学校史(稿)』(1990年、自費出版)があり、両学校の同窓会として結成さ

れていた「高士会」は1995年、吹雪山での記念碑建立に合わせて、記念誌『嗚呼、豊橋』を製作している。また、予備士官学校の存在時（1943年）に当時の同窓会が編纂した『殉皇 豊橋陸軍豫備士官学校の記』の復刻版が、1977年に同学校OBの伊藤崇郎氏の編著によって刊行され、詳しい解説も設けられている（3年後増訂版を刊行）。

いっぽう、旧日本陸軍全般についての書物での関連書としては、太平洋戦争開戦後の1943（昭和18）年に豊橋陸軍予備士官学校に在学した山本七平氏（「イザヤ・ペンダサン」と名乗り、日中戦争での南京虐殺事件に関する論争を展開したことで著名）が、『一下級将校の見た帝国陸軍』（1976年、朝日新聞社）で同学校時代のことにふれている。ここで山本氏が、「日本では珍しいほど広漠とした」演習地である高師・天伯原の「入口近くに訓練用の中国風城壁があっ」たと述懐していることには興味がひかれるが、そのあと「いきなり、ジャングル戦の訓練をはじめよ、などと言われても、第一、演習場も訓練用設備もない。第二に、砲も機材も、(……) 高温多湿の熱地用ではなかった」⁶⁾としているように、対ソ連戦から対米英戦へと急に想定を（開戦後になって）転換した陸軍の“お粗末さ”を述べていることこそ真っ先に注目しなければなるまい。

そのほか、ノンフィクション作家の保阪正康氏は『昭和陸軍の研究 下』（1999年、同社）で、山本氏と同時期に同校に在学していた今西英造氏への聞き取りの形で、予備士官学校全体の解説をした上で、「今西は(……) 八カ月間、学校からは一歩も外出が許されず、それこそ一日二十四時間すべてが訓練という日々であった」「卒業生の三分の二は豊橋から（注、青森県の）大湊への赴任が命じられ、エンジンをかけたままになっている輸送機に乗せられた。すぐに戦場にかけてるのである。今西はこの三分の二のなかには入らなかったが、戦後になってわかったのは、実に彼らの三分の一は戦死していたことだった」⁷⁾と、生徒たちの冷厳な現実を記している。

最近では、豊橋市教育長等をつとめた兵東政夫氏が2007年に著書『軍都豊橋』（自費出版）で、第十五師団をはじめとする豊橋の各部隊とともに陸軍教導・予備士官両学校の歩みを詳しく述べているほか、同年にやはり地元の太田幸市氏が刊行した『豊橋軍事史叢話（上巻）』（三遠戦跡懇談会）では、二二六事件と豊橋陸軍教導学校との関わりについての話（東京での決起に合わせ、同学校の教官2名が静岡県興津の西園寺公望邸を襲撃しようとした）も設けられている⁸⁾。また、西口町移転後の豊橋教導学校に伯父が在学していた田宮昌子氏は、自らが愛知大学と同大学院の出身であったことから、2007年末刊行の『中国21』Vol. 28（愛知大学現代中国学会）で論稿「個人史から考える日中近現代関係史」を發表して、(場所は異なるが) 伯父と自身の“因縁”をしみじみと語っている。

(2) 関連した各史料

いっぽう、当時の記録（自身でこれまで確認したもの）としては、防衛省の防衛研究所図書館に、敗戦直後に解散前の豊橋陸軍予備士官学校が作成した「豊橋陸軍豫備士官学校状況説明書」が収蔵されているが（前記の『嗚呼、豊橋』にその全文の写真が掲載されている）、内容としては復員状況の報告を中心とした簡単なものであり⁹⁾、敗戦で一連の資料を焼却したあとになって、必要に迫られて急いで間に合わせたものと思われる。

静岡県磐田市（旧竜洋町）には、天竜川で教導学校騎兵科が毎年7月に行なっていた幕営（野外演習）に関する1936、37年の文書が自治会に数点残されていて、そのうち2点が『竜洋町史』の『～資料編Ⅱ 近現代』に収録され、続いて同史の『～通史編』でも引用されている。そこではまず教導学校側からの「教育予定表」から、この「爆破及水中演習」の日程が10日間であったことや、内容が「鉄橋爆破の諸作業」「水馬に関する教育」「各種軽渡河法」「游泳漕舟並に幕営に関する教育」の実施や習得であったことがわかり、さらに地元の区長から村長および在郷軍人会長への教導学校

幕営実施の通知や、騎兵学生隊長から区長への礼状などがあり、現地住民も演習に協力する体制がとられていたこともわかる。とりわけ学校側の責任者が書いたと思われる「幕営に就ての所感」での記述には、「軍隊の支給区分と地元の支払とを大部分異なるを以て、其の金額に就て疑念を抱く向ある事は（注、演習開始からの）三ヶ年を通して耳にす。実に遺憾なり。然共之れは其の实情を知らざるもの、言葉なれども、将来其の禍根を一掃する方策なきか」¹⁰⁾とあるように、演習に際して教導学校と地元との間に、補償額をめぐる微妙かつ複雑な関係があったと見て取れることは、満州事変が日中戦争へと拡大しようとしていたこの時期からいって興味深い。

新聞史料では、当時の地元紙の一つであった『豊橋日日新聞』（第十五師団廃止時に当局・住民の積極的な対処を主張）に、1933年の教導学校拡張に際して以前より問題となっていた「演習場賠償問題」の解決を呼びかけた社説が見られる。これは、高師・天伯原での大規模演習で被害を受けていた周辺農家への補償額をめぐる、軍と地元との交渉が難航していた問題であり、天竜川での事態に通じるものがあるが、事実こちらでは問題が深刻化して一時は演習ができなくなったほどであり、第十五師団の廃止や、代替に新設された高射砲・飛行部隊が浜松へすぐに移転したことの原因という噂も流れていた¹¹⁾。いずれにせよ教導学校の開設は実質、師団廃止の再代替という形といえたが、同紙はこうして豊橋が“軍都”としての地位を失ったからこそ「市民の自覚によつて豊橋市が将来其の自力を發揮して商工業に一大飛躍を為すべき^{ようらん}播磨時代に入つたことは大いに力強さを感じしめる」とした一方で、「軍隊と古い因縁ある我が豊橋市に」教導学校が拡充されることになった今こそ「豊橋市と軍隊とは将来益々其の密接の度を増すの可能性を地理的にもつてある^{だけ}丈に多年癩となつてある演習場問題の解決を図ることも商工業の発展と共に等閑に附することは出来ない」と結んでいるのであり、その主張の背後には

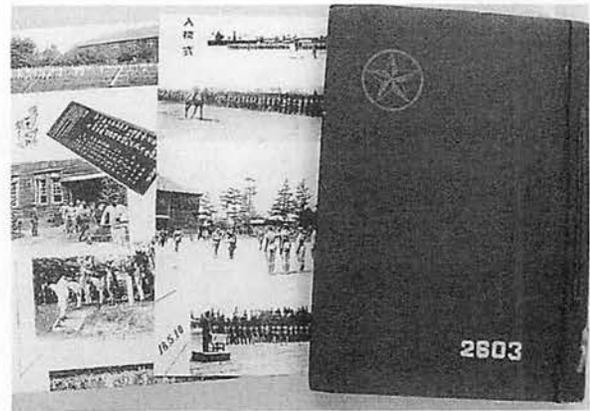


写真 豊橋第一陸軍予備士官学校砲兵生徒隊「中尾隊」の卒業記念アルバム『研鑽の頃』（中身のページはコピー）

表紙の「2603」（日本紀元）は1943（昭和18）年のこと。太平洋戦争になってからの製作であるが、品質の良い仕上がりになっている。（愛知大学大学史事務室所蔵）

前々年来の「満洲上海両事変突破以来の銃後の衛りの実績」があった¹²⁾。

そして演習場問題は、時局が進んでいくなか1938年に、軍部主導の形で一応の決着を見ることになり、その直後に移行した陸軍予備士官学校では、前述の通りその演習場で激烈な訓練が繰り広げられることになった。

3. 豊橋陸軍予備士官学校から愛知大学へ

(1) 愛知大学等への転用

1945（昭和20）年8月の敗戦により授業・訓練を停止した豊橋（第一）陸軍予備士官学校は、一時は徹底抗戦を叫ぶ「不穏な動き」もあったようであるが、同月末までに復員等の残務処理を無事に終えて消滅し¹³⁾、旧第十五師団全体の跡地は国有地のまま豊橋市が管理することになった。同市は同年11月に「豊橋市払下貸下軍用土地建物利用案」を発表して、旧軍施設ごとの利用案を列記したが、「どの施設にも住宅や官公庁、学校等の利用計画が目白押しであつた¹⁴⁾」（付表4参照）。

そしてまず街道を挟んで西側の旧砲兵隊敷地に、同年6月の豊橋空襲で校舎を焼失していた豊橋中学（もと愛知四中、現時習館高校）が入り、

付表4 豊橋（もと第一）陸軍予備士官学校及び、
周囲の陸軍各施設の学校転用計画（1945.11）

終戦時の用途	計画された転用先	実際の転用先
豊橋陸軍予備士官学校 歩兵隊	名古屋工業専門学校 (現名古屋工業大学)	愛知大学 豊橋校舎
豊橋陸軍予備士官学校 砲兵隊	県立豊橋中学校 (現県立時習館高校)	同左及び、各公 営施設
名古屋陸軍兵器補給廠 豊橋分廠	豊橋市立工業学校 (現県立豊橋工業高校)	同左及び、県立 豊橋聾学校
名古屋陸軍兵器補給廠 豊橋分廠東倉庫	豊橋市立商業学校 (現県立豊橋商業高校)	場所不明 (現住宅地か)
名古屋師団管区兵器部 豊橋出張所(兵器廠)	豊橋市立農業学校 (新設予定)	同左→市立南部 中学・栄小学校

注：豊橋市立商業学校は市内東部の工兵連隊跡に移転し、農業学
校は時習館高農業科となったのち廃止。

出典：水口源彦『南栄町物語』153ページの記述より作成。

さらに東側の旧本部・歩兵隊敷地に、敗戦により中国・上海で消滅した日本人学校である、東亜同文書院大学から引き揚げてきた関係者有志による新大学が、翌46年11月15日に愛知大学として当時の文部省によって認可され、創設された。周囲の他の軍用施設にも各学校が入り、敗戦まで「軍隊の街」と呼ばれていた近隣の地区は、「学園の街」へと変貌するにいたったのである。

旧陸軍予備士官学校の敷地・施設が愛知大学に生まれ変わるまでの、本間喜一元同文書院学長を中心とした有志の一連の努力については、『愛知大学五十年史』や(その要約版の)『愛知大学小史』などの関連各書論を参照していただくとして、ここでは以下、愛知大の創設実現には予備士官学校跡地を管理していた豊橋市の多大な協力があつたことを、第十五師団消滅時にも地元が廃止部隊跡地の払い下げを望んだがほとんどかなわなかった事実と考え合わせつつ付言するとともに¹⁵⁾、具体的に予備士官学校と創設時の愛大との接点といえるものは何かあつたのかという面から見てみたい。

(2) 施設・備品の愛知大への活用

早期に設立認可を果たした愛知大学では、2カ月後の1947年1月15日に予定された入学式に向

けての準備が急ピッチで進められた。この時期の施設・設備面での業務について、最初に編集された年史である『愛知大学十年の歩み』では、「先づ寮の整備が学生課の急務であつた。寮には予備士官学校時代兵舎として使用された建物の中三棟を転用することに決し、破損された窓ガラスの修理、崩れ落ちた壁の塗り替へ、旧内務班室の改善、電灯の取付等、(……)一月二十日には一応整備を完了することができた。／又寮備品としては、豊橋市役所特殊物件中より旧軍用ベッド、マツト、机、腰掛等の払下げを受けて之を充当、(……)一部生徒の献身的協力により、翌年一月十日迄

には寮生三百五十名を収容するに足る施設を一応完了」¹⁶⁾と、当時の記録(詳細は不明)からの抜粋の形で述べている。

ここにある「市役所特殊物件」としての「旧軍用」の品々については、『愛知大学五十年史 資料編』に収録されている『愛知大学設立認可申請』での、「創立費及供託金収支予算表」の項の「註」にある「豊橋市ニ於テハ特ニ本学ノタメニ市所有品ノ一部及今回払下ヲ受ケタル豊橋市内旧軍施設備品ヲ保留シ居リ第一、第二予備士官学校ヲハジメ豊橋市内所在ノ旧陸海軍施設数ヶ所ノ特殊物件ハ現在同市ニ於テ鋭意整理中ニシテ(……)別紙備品目録ニ記載セル備品ハ其ノ全部ヲ同市ヨリ無償貸与ヲ受ケル筈ナリ」¹⁷⁾との記述で裏づけられる。このように、市から貸与されたはずの旧軍備品のすべてが(第一)予備士官学校のものというわけではなかったが、続く「別紙備品目録」には11項目で計123種が列記されていて、先の引用文中のものでは「学生寄宿舎関係」として各700人分(収用予定人員)が用意されている¹⁸⁾。旧予備士官学校の備品が現場に置かれたままになっていたのか、それともいったん別の場所に移して保管されていたのかという点は明確ではないが、同学校の備品が相当数、元の場所で愛知大学により活用されるにいたったことは間違いなく、物資不

足のなか勉強や事務、そして生活に大いに役立ったことは想像に難くない。

事実、2007年に愛知大学同窓会創立55周年記念誌として同会より刊行された『学生たちの証言で綴る 創成期の愛知大学』では、1952年に旧制法経学部経済科を卒業した新井（旧姓相川）正雄氏の「予科時代は学期末毎に通信簿を頂いたが（……）A5サイズで旧陸軍予備士官学校の伝票の裏側を再利用したガリ版刷りの簡素なもので、物資の乏しい時代の遺物であった」との証言を収録しているとともに、実際にその通信簿の写真（「諸元計算表」の裏面を再利用していることがわかる）を次のページに掲載しているのである¹⁹⁾。同誌は題名の通り、創立当初（昭和でいうと20年代）の各卒業生の証言（寄稿）によって構成されているが、ほかの各氏による記述でも旧予備士官学校の施設についてある程度ふれられている²⁰⁾。それらには設備が“粗末だった”“荒廃していた”との印象を記したものが目立つものの、“それでも再び学べる喜びは大きかった”ことの記述がそれを上回っているのであって、創設時の愛知大学は形のみ残った陸軍予備士官学校の地において、日本の内外から集結した教員・学生の新たな向学心のもと、予備士官学校の建物と備品を用いて“一からのスタートを切った”と見るべきであろう。

おわりに

ここで私個人に関することを述べて恐縮であるが、現在私は愛知大学東亜同文書院大学記念センター内の大学史事務室での業務の一つとして、学外からの来客に対して同大学豊橋校舎に残る旧軍施設を案内する役目も担っている。実はそれら「来客」の内訳は、愛知大学の卒業生のほかにも、豊橋陸軍予備士官学校に在学していた方もいるのであって、私はそうした方々を案内するたびに、同学校についての新たな発見をさせていただけるとともに、すでに高齢に達した元予備士官学校生の“ぜひもう一度学校跡を見てみたい”との強

い思いにはただ敬服するのみとの感にいたっているばかりである。

また、愛知大学に在学している学生に対しても、2007年度より講義「大学史」の一環として、私は同講義を選択した彼・彼女らに豊橋校舎内を案内している。その際作成、提出させた感想文のうち、今2009年度のものに興味ある記述があったので紹介したい。

愛知大学の豊橋キャンパスは大きく分けた場合、二つの要素から成り立っているということがわかった。／一つは、豊橋キャンパスというのは施設や地形の利用といった点で陸軍第十五師団及び陸軍〔予備〕士官学校時代の影響を強く受けているということであった。／もう一つは、愛知大学の精神や校風といったものは（……）東亜同文書院〔大学〕の影響を強く受けていることである。この二つの要素から考えると、キャンパスには軍国主義的な時代の面影を残しながらも、東亜同文書院の精神や校風といったものは受け継がれ、軍国主義が消滅した新しい時代に適した形となったのが、この愛知大学なのであろう²¹⁾。（〔 〕内は補足）

これを書いた学生は文学部の1年生であり、入学後まもない頃（5月）に思った“第一印象”ということになるが、この段階から“施設面での前身”たる予備士官学校を（第十五師団からを含めて）客体として認識した点に注目したい。名古屋笹島地区への一部移転を近く控え、愛知大学豊橋校舎の存在が見つめ直されるべき今、同大学や地元の人々は（その前にその場にあった）陸軍教導・予備士官学校とその時代について看過すべきでなく、最低限のことは認知しなければならないのではなかろうか。

（本稿は、2008年1月12日に愛知大学豊橋校舎での三河地域史研究会例会で発表した、「豊橋陸軍教導学校と予備士官学校について」の原稿が基底になっている。同会での発表の機会を下さった、田崎哲郎愛知大学名誉教授に感謝申し上げる次第である）

註

- 1) 「宇垣軍縮」は実行した宇垣一成陸軍大臣にちなんだ呼称であるが、宇垣の主眼は（当時求める声が強かった）陸軍師団削減を表向きの施策として、余剰経費の軍装備近代化や余剰将校の軍事教育員への転用を実質目的としたものであった。この時廃止された師団は豊橋のほか、（新潟県の）高田、岡山、久留米であったが、これらはすべて比較的あとに設置されたものであり、宇垣は歴戦の師団を廃止することを避けつつ、廃止した師団の敷地を軍施設のまま活用したのであって、旧第十五師団跡の教導学校への転用はその一環であった（拙稿「宇垣軍縮と“軍都・豊橋”」『愛大史学』第4号、1995年、参照）。
- 2) 「戦後60年」の頃から、「旧軍施設」の存在は“あの時代をこれからも伝えるもの”として注目されつつあって、愛知大学に残っているものについても実地取材のうえ、太平洋戦争研究会編『戦争遺跡を歩く』（2006年、ビジネス社）などで紹介されている。
- 3) 一般兵士への下士官教育を目的とした教導団（前身は教導隊。1873年東京から千葉県に移転）は各兵科とも設けられていて、優秀卒業生は士官学校へ入る道が開かれていたので、のち首相となった田中義一をはじめ、出身者から多くの将官を輩出した。
- 4) 第十五師団の頃から、現愛大南部の師団本部と（最初に教導学校に転用された）北部の第六十連隊敷地とは土手（現在も大学内に一部残存）で厳格に区分されていて、（本文で後述する教導学校拡張、予備士官学校への転用後ともども）師団時の兵士も教導・予備士官学校生徒も、土手に設けられた門をくぐることは許されなかったようである（愛知大学を訪問された豊橋予備士官学校卒業生の方もそう証言）。
- 5) このあたりの経緯は複雑であり、とりわけ（従前の）豊橋陸軍予備士官学校に「第一」をつけるかという点で各記述に混乱が見られるが、少なくとも、「第一」がついていた時期は「豊橋第一陸軍予備士官学校」と、「第一」が「豊橋」と「陸軍」との間に位置していたことを間違えてはならない。
- 6) 山本七平『一下級将校の見た帝国陸軍』（1987年文春文庫版）43ページ。南京虐殺事件についての論争では、「百人斬り競争」を行なったとされる二人の少尉を、雑誌『諸君！』などで弁護した同氏であるが、続く記述のように、旧日本陸軍の構造や体質については厳しい批判の目を向けていたことに注目されたい。
- 7) 保阪正康『昭和陸軍の研究 下』（2006年朝日文庫版）411ページ。今西氏の著書には『昭和陸軍派閥抗争史』（1983年新版、伝統と現代社）があり、保阪氏は先の書で「きわめて実証的に書かれている」（410ページ）と評価している。
なお、豊橋陸軍予備士官学校出身の著名人としてほかには、奇想天外な喜劇や、太平洋戦争を取り上げた作品（「日本のいちばん長い日」など）で知られる映画監督の岡本喜八氏があげられ、同氏は在学中に敗戦を迎えている（豊橋市中央図書館の彦坂茂雄氏が寄贈して下さった資料による）。
- 8) この話は太田氏の書に限らず、浪崎氏遺作の『豊橋陸軍教導学校史（稿）』や兵東氏の『軍都豊橋』でもふれられている。
- 9) 同文書の内容は、本文が「一、学校歴史ノ概要」「二、学校復員前ノ状況」「三、復員ニ伴フ處理ノ概況」から成っているほか、別紙でこの時点での豊橋陸軍予備士官学校の地理的位置と配置図が、やはり簡単な形ながらも記されている。
- 10) 竜洋町史編さん委員会編『竜洋町史 資料編Ⅱ 近現代』（2006年）409、410ページおよび、同会編『竜洋町史 通史編』（2009年）639～640ページ。私は同委員会の専門委員を務めていたことから、自らこれら資料を発見、検討したことを付言しておきたい。
- 11) これら「演習場（地）賠償問題」については、拙稿「戦前軍縮期の高師・天伯原における『演習地賠償問題』について」（豊橋技術科学大学人文・社会工学系紀要『雲雀野』第27号、2005年）を参照されたい。
- 12) 1933.7.23付『豊橋日日新聞』「演習場問題を等閑視するな」（豊橋市中央図書館所蔵のマイクロフィルム版）。同紙の第十五師団廃止以来の主張については、前掲の拙稿「宇垣軍縮と“軍都・豊橋”」および、同「国防」運動と“軍都・豊橋”（上）（下）」（『愛知大学国際問題研究所紀要』第107、108号、1997年）に記述。
- 13) 前掲「豊橋陸軍豫備士官学校状況説明書」。本文中の「不穏な動き」とは、前掲『軍都豊橋』308ページの「校内の不穏な動きは一層高まっていて、一種異様な空気に包まれていた。（……）学校長は再度全将校を集め、武人としての最後を全うしよう訴えた。校内の空気は急速に平静に戻った」との、敗戦から8月26日までの様子からの引用。
- 14) 水口源彦『南栄町物語—軍隊の街から学園の街へ—』（1996年）152ページ。
- 15) これらの動きは、前掲の拙稿「宇垣軍縮と“軍都・豊橋”」および、同「昭和恐慌期における名古屋第三師団移転問題について」（『愛知県史研究』第7号、2003年）に記述。
- 16) 愛知大学十年史編纂委員会編『愛知大学 十年の歩

- み』(1956年)42ページ。愛知大学五十年史編纂委員会編『愛知大学五十年史 通史編』(2000年)34ページにも引用されている。
- 17) 愛知大学五十年史編纂委員会編『愛知大学五十年史 資料編』(1997年)21ページ(引用文の漢字は新字体で表記)。前掲「豊橋陸軍豫備士官学校状況説明書」の文末にも「軍需諸雑品」は「規定ニ基キ豊橋市ニ引繼ヲナス」とある。
- 18) 同前『愛知大学五十年史 資料編』30ページ。「別紙備品目録」は同書の28～34ページに収録されている。
- 19) 愛知大学同窓会創立55周年記念誌編集委員会編『学生たちの証言で綴る 創成期の愛知大学』(2007年)74、75ページ。
- 20) 同前誌に寄稿した卒業生49名中、愛知大学の地にあった「旧陸軍予備士官学校校舎」についてふれている人は18名(37パーセント)であり、本文の新井氏のほかにも、寮食堂の調理長は「予備士官学校時代から調理を担当しておられた」(1950年旧制法
- 経学部経済科卒の今田太郎氏の文、65ページ)とあった、興味ある証言を寄せている人もいる。また、元東海日日新聞社長の長谷川哲男氏による同誌の書評が、本『愛知大学史研究』第2号(2008年)に収録されている。
- 21) 愛知大学豊橋校舎の講義「大学史」受講生を対象に、2009年5月1日実施した「愛知大学キャンパス案内」の一参加者が記した感想文(2週間後提出)の一節より。
- この行事(名古屋校舎では「豊橋校舎キャンパスツアー」と呼称)については、同前『愛知大学史研究』第2号に収録の拙稿「愛知大学キャンパスツアー」に記述。
- (付記)『軍都豊橋』を著わされた兵東政夫氏および、豊橋陸軍教導学校を卒業されたのち同予備士官学校で砲兵科助教を務められた(私にも資料や証言を下さった)広田長平氏が、先に他界されたことにつきましては、心よりご冥福をお祈り申し上げます。